

---

# しにがみのバラッド ～0の死神のお話～

境嘉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

しにがみのバラッド ～0の死神のお話～

### 【コード】

N6883K

### 【作者名】

境嘉

### 【あらすじ】

少年は死神になり、いろんな人達と関わっていき、そして白い死神に出会った。

この物語はしにがみのバラッドの世界で、ある死神の視点から描いた物語。

## 第一章 終わりの始まり（前書き）

ども、初めてここで小説投稿させてもらいます、境嘉と言います。  
まだ初めてなので、いろいろ見苦しところがあると思いますが、  
よろしくお願いしますm(\_\_\_\_\_)m

## 第一章 終わりの始まり

「人は死ぬと、死神になる」 小さい頃、友達がそんなことを言っていたのを思い出した。その言葉は成長するにつれ、頭の中から消えていき、ついさつきまで忘れていた。

しかし俺は今思い出した。 薄れていく意識のなかで……

+++++

人はいつ死ぬかわからない。交通事故で死んだり、誰かに殺されたり……。だから、『死』って言うのは突然くるんだと思っ  
てた。

そして、俺にも『死』が突然訪れた。

いつも通りバイトが終わり、家に帰って来たときだった。リビングで母親が父親を殺していた。もともと仲が悪い夫婦だったのはわかっていたが、まさか母親が父親を殺すとは思ひもしなかった。母親が俺に気が付く。その顔は涙と返り血でグシャグシャだった。そして死体から刃物のを抜き取り、母親がゆっくり俺に近いくる。

殺される。その言葉が頭の中を巡り逃げようとした。 だけど  
できなかつた。理由なんて簡単だ。血だらけの母親がおり、父親の死体が床に転がっている、その光景怖くて足が動かなかつただけ。 ただそれだけのこと……。

そして、母親が突進してきて、手に持ってる刃物を俺の腹部に深々と突き刺した。 痛いと言うより、刺されたところがすごく熱い  
感覚だった。 母親が刃物をズルリと抜くのがわかつた。 「ごめんね、ごめんね」 そう言いながら母親が後退りしていく。

「ごめんなさい」 母親は最後にそう言い、手に持ってる刃物で自らの首を切つた。 血が噴水のように切り口から噴射して、母親は

その場に倒れた。

俺は立っていることができなくなり、その場に座り込んだ。背を後ろの壁に預ける。傷口から血がどんどん流れていくのがわかる。薄れていく意識の中、最後に真っ白い少女に出会った。

その少女は白い花みたいで、綺麗だった。でも彼女は……

十十十十十十十十十十十

そして、俺が目を覚ましたとき、そこは全てが白で埋め尽くされた場所だった。

## 第一章 終わりの始まり（後書き）

いかがでしたか？

まだ、下手くそですがこれからも頑張って小説を書いて、投稿して  
いこうと思います

下手くそな小説を読んでくれて、ありがとうございましたm（――）（

m

## 第二章 出会い（前書き）

最初の投稿からかなり時間がかかってしまいました（汗

今回は感想を元に文を長く書いてみました。

## 第二章 出会い

何処だ、ここ？ その言葉が頭の中で巡る。

そこは全てが白で埋め尽くされた場所。床も、天井も、何もかもが白で染め上げていた。そんななか、ふとあることに気付いた。

「あれ、俺なんでロングコートなんか着ているんだ？ さっきまで俺は……」と、さっきまで着ていた服を思い出そうとした。

が、思い出そうとすると頭の中が真っ白になって思い出せなかった。

「……………」？ 不思議に思ったが、まあ気にしないで良いか。

そんなことを思いながら今自分が着ているロングコートを調べてみた。色は黒一色でフード付きだ。しかしサイズが合っていないせいか、やけに長い。ポケットに手をつ込み何かないか探ってみると、右側のポケットに何かあるのがわかった。ポケットから取り出してみると、それは免許証みたいなカードだった。

『コードA00-00』

「……………」なんだこれ？ ぼつりとそんな独り言を口から漏らしながら、カードを裏にしたり、表にしたりして調べてみる。

「……………」？ しかし、どこからどう見ても、ただの免許証にしか見えない。まあ、気にしないで良いか。そんなことを思いながら、カードをポケットに突っ込んだ。

さてと、今からどうするかねえ。頭の中でそう呟いたときだった。

「おはよう 『コードA00-00』」 背後からトーンの低い声が聞こえた。いきなりの声に驚き、後ろを見る。さつきまで人なんていなかったのに、そこには数人の老人がいた。

あまりの出来事に頭の中が混乱する。そんな中、あることに疑問を感じた。「……………」おはよう？」 そう、老人の一人が言ったのだろう、「おはよう」。なんで？

頭の中でいろんなことが飛びかう俺を差し置いて、一人の老人



が口を開いた。 「おはよう 『コードA00・00』。 これからキミは”死神”としてここで働いてもらう」  
……  
…はあ？

+++++

そこはとても不思議な世界。 下を見ると青い大海原が広がっており、上を見るとコンクリートで出来たジャングルが広がっている。 とても、とても不思議な世界。

そんな世界の中心に小さな影があった。 影の持ち主はどこか不安そうな顔で辺りをキョロキョロと見ていた。

「今日から使い魔として働くことになるけど…、き、緊張するなあ」  
その声は可愛いらしい声なのに、その言葉にはどこか不安に満ちていた。

「使い魔としての仕事はちゃんと教えてもらっているけど、大丈夫かなあ、私」 声の持ち主の姿は雪のように白く、その背中にはコウモリのような白い翼がついていた。

「怖くない人が良いんだけどなあ あっ！ 自己紹介のときに間違えちゃったらどうしよう…」 恥ずかしいなあ

彼女がぶつぶつと独り言を言っていると、

「あのだ、ちよつといいか？」 突然後ろから声をかけられた。

「は、はい！！」 彼女は突然の出来事にビクツとして、反射的に大きく返事をして声の持ち主の方を向いた。

そこには黒いロングコートを着た少年が、どこかめんどくさそうな顔でこつちを見ていた。

+++++

死神か… 口からぼろりと言葉が漏れる。 先ほど老人達から自分がこれから死神として働くことを聞かされた。

しかし、なぜ自分が死神になったのか、その理由は教えてもらえなかった。

今自分が居るところはとても不思議な場所だった。上  
を見ると灰色の高層ビルが所狭しと建っており、下を見ると青空が  
絨毯のように広がっていた。

老人達の話ではここで使い魔と会うように言われているのだ  
が……。あたりをキョロキョロと見回す。と、遠くの  
方にそれらしい奴を発見した。何もない場所を歩いているかの  
ように、ゆっくりとそいつに近づいた。

そいつはぶつぶつと何か独り言を言っており、後ろに俺がい  
ても気づいていなかった。

しかし驚いた。使い魔と言うから化け物みたいな奴かと思  
っていたが、今自分の目の前にいるそいつは……。『猫』だった。

毛並みは真っ白でしかも子猫である。しかし、猫の姿をし  
てるのにその背中にはコウモリのようなツバサがついていた。

「あのさ、ちょっといいか？」 「は、はい！！」 声  
をかけるとそいつは大きな返事と共に顔をこっちに向けた。

+++++

「えーと、今日からお前が俺の使い魔？」 「は、はい！  
そうです！ きき、今日からあなたの使い魔として、は、働かせ  
てもらおう、ルーウィと申します」

ルーウィと名乗った彼女はとても緊張しており、綺麗な水色の  
目が涙ぐんでいた。

「そうか んじゃ、これからよろしくな、ルーウィ」  
俺が笑顔でそう言うと、 「はい！ これからよろしくお願  
いします、マスター！」

ルーウィはさっきまでの緊張がちょっとほぐれたのか、ニコッ  
として言ったのであった。

## 第二章 出会い（後書き）

いかがでしたか？

まだまだ下手くそなところがございますが、次も頑張っ  
て書いていこうと思います

それでは、読んでくださった皆さん、ありがとうございました  
m )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6883k/>

---

しにがみのバラッド ~0の死神のお話~

2010年12月31日04時12分発行